

予防接種について

もとはしクリニック

本橋 和夫 先生

予防接種は各種の感染症に対して、感染予防、発病防止、病気の蔓延化防止などを目的に行われます。最近、フィリピンから帰国した人が狂犬病を発病して話題になりました。狂犬病は国内にウィルスはいないと言われている病気ですが、発病してしまうと治療がなく、ほぼ100%死亡します。ただ、咬まれた直後なら、ヒト狂犬病免疫グロブリンの投与とワクチン接種により発病をほぼ阻止できるとされています。狂犬病はアジアとアフリカではイヌ、ヨーロッパではキツネ、アメリカではスカンク、アライグマ、キツネ、コウモリに流行がみられています。外国では動物に対する注意が必要でしょう。

6月より、新しいワクチンによる日本脳炎ワクチンの接種が再開されました。日本脳炎は突然の高熱、頭痛嘔吐、意識障害およびけいれんなどを症状とする急性の脳炎で、ブタが日本脳炎ウィルスを増幅させる宿主(病原体と共生する生物)です。最近の検査で全都道府県のブタの多くに日本脳炎ウィルスが検出されています。ウィルスはコガタアカイエカという蚊を介して人に感染します、感染者の多くは夏風邪のような症状で終わりますが、100~千人に一人が脳炎を発症します。狂犬病と同じで発症してしまうと特異的な治療はなく、死亡率20~40%。治癒しても多くの方が神経の後遺症を残します。ワクチンの開発される昭和41年までは、年間千人を超える患者発生がありました。新しいワクチンは3歳から7歳5ヶ月までのI期の定期接種に使用可能で、現在まで重篤な副作用の報告はありません。7歳6ヶ月以降の接種については今後の検討課題になっています。

最近では、おたふくかぜも問題になっています。罹患後、重症の難聴の生じることが知られていて、両側性の難聴は1万5千人に一人程度ですが、片側性の難聴は400~700人に一人と高頻度になります。現在では、できるだけ罹患しない方が良く考えられています。